探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：竹原市立吉名学園校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
竹原市立吉名学園	13	121

（R5.12.1現在で記入）

１　研究の概要

（１）昨年度の課題

○児童生徒の「自立した学び」となるよう、児童生徒に学習を委ねる教師のファシリテートの理念と技術を共有する。
○実生活・実社会への還元に向けた実行段階や児童生徒の思考の流れに沿うことを意識した単元を構想する。

（２）研究テーマ及び研究のねらい

主体的に学び、自分の言葉で語る児童生徒の育成
－郷土に学び、未来を拓くプロジェクト型学習を通して－

学校教育目標に掲げる「拓く力」の育成に向け、３年前から同じテーマで研究を進めてきた。これまでの成果を生かし発展させることを目指して、今年度も、引き続き同じテーマを掲げて研究を進めることにした。ただし、今年度は、昨年度の課題を受け、「課題に向き合う熱量を高める」をスローガンとして掲げ、取組を進めた。

研究推進に当たっては「児童生徒にとって充実した活動」の視点と「資質・能力の確実な育成」の視点の二つの視点をもって進めている。

（３）「資質・能力の確実な育成」の視点

【資質・能力の設定と系統化】

本校では、総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力と学校教育目標に掲げる「拓く力」を具体化した「ＩＣＴ活用力」「英語力」「プレゼンテーション力」とを重ね合わせ、「YOSHINA未来学で育成したい力」として13の資質・能力を設定している。

① 知識及び技能
　ア　知識
　イ　技能（主としてＩＣＴ活用技能）
② 思考力・判断力・表現力等
　ウ　課題を発見する力・企画する力
　エ　活動を計画・推進する力
　オ　情報を収集する力
　カ　整理・分析する力
　キ　表現する力
　ク　発想する力・工夫する力
　ケ　評価する力
③ 学びに向かう力・人間性等
　コ　挑戦する力・改善する力・やり遂げる力
　サ　協働する力
　シ　将来を設計する力

　ス　英語力

そして、「YOSHINA未来学で育成したい力」の系統化を図った。具体的には、第Ⅰ期（第１学年及び第２学年）、第Ⅱ期（第３学年及び第４学年）、第Ⅲ期（第５学年から第７学年）、第Ⅳ期（第８学年及び第９学年）の四つの段階を設定し、それぞれの段階での資質・能力を発揮した姿を具体化して系統表を作成した。なお、本校では、第１学年及び第２学年においても、「YOSHINA未来学で育成したい力」に基づいて単元の目標及び評価規準を設定している。ただし、生活科で育成を目指す資質・能力と本校で設定した「YOSHINA未来学で育成したい力」で重ならないものについては、記録に残す評価は行わず、指導に生かす評価のみを行うこととしている。

この系統表に基づいて各単元の評価規準を設定するとともに、次の段階を意識してルーブリックを作成した

（４）児童生徒にとって充実した活動の視点

【共通の視点に基づいた単元開発及び実践】

これまでの実践研究の知見を、「YOSHINA未来学」の単元づくりにおける共通の視点とし、それに基づいて全学年で単元開発及び実践を行った。共通の視点とは次の二つである。

一つは、「単元の三つの型」（図１）である。PBL（プロジェクト型学習）の考え方を参考に、「夢実現型」「提言型」「貢献型」の三つの型を示し、それに基づいて各学年で扱う材等を踏まえて、単元開発を行った。なお、夢実現型と貢献型が融合するといった場合もある。いずれにせよ、児童生徒の「やってみたい」「なんとかしなければ」という思いや願いから単元が立ち上がるものだという共通認識に立っている。

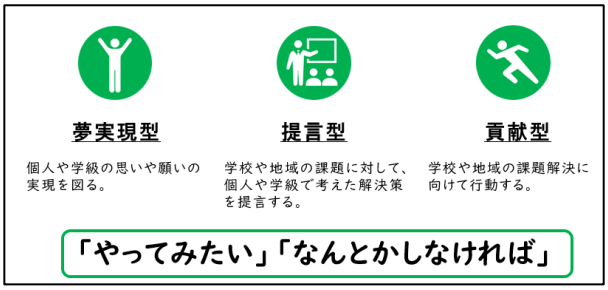


図１　単元の三つの型

もう一つは、「単元づくりの五つのポイント」（図２）である。これまでの授業研究で効果的であった学習を進めるポイントを五つに整理し、それに基づいて単元開発・実践を行った。昨年度からの大きな変更点としては、「コミュニティ・スクール制度の活用」からさらに実生活・実社会とつなげるために「『本物』からの学び」に変更した。

今年度は、昨年度の成果と課題を受け、五つのポイントの中から、「本気になる課題設定」「思いや願いに基づく挑戦」「『本物』からの学び」を重点に、単元開発及び実践を進めた。

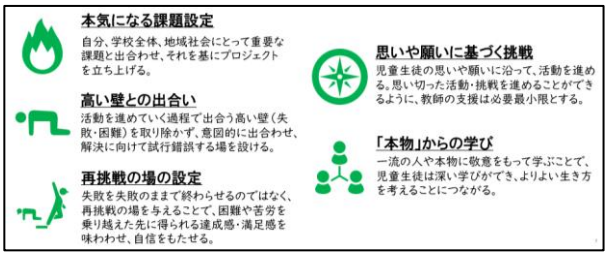


図２　単元づくりの五つのポイント

２　実践事例

前述した「単元の三つの型」「単元づくりの五つのポイント」に基づいて単元開発・実践を行った。本稿では、第９学年の単元の流れを示す。

第９学年「わたしたちの力で吉名町を盛り上げよう」

①地域を盛り上げるために自分たちがやりたいことを話し合う。

②地域の祭りに協力するか、新たなイベントを立ち上げるかで意見が分かれる。
⇒結論が出ないため、グループに分かれて準備を進める。

③グループごとに企画を練り、学校運営協議会で提案する。
⇒委員の方から厳しいご指摘をいただく。

④指摘を踏まえて、企画の改善を図る。その際、専門家の方からアドバイスをいただく。

地域でレストランを営む西野さん

イベントの企画やMCをされる山本さん

⑤イベントの実現に向けて、外部との交渉や準備を進める。

会場の下見

保健所への連絡

⑥生徒と教職員を対象に学校で模擬店を行う。

⑦模擬店での活動を振り返り、成果と課題を明らかにして、イベント当日に向けて不十分だった点を改善する。

⑧自分たちでイベントを実施する。

⑨単元全体を振り返る。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

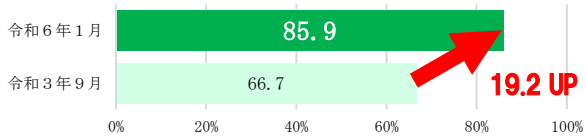
○ 児童生徒が「やってみたい」「なんとかしなければ」という思いや願いを基に目標や計画を立て、様々な困難や失敗と出合ったり、迷ったりしながらも、自ら学びを調整しながら課題を解決していくという「自立した学び」へ転換を図るという理念の共有を図ることができた。

○ 全学年で「単元づくりの五つのポイント」を意識した単元開発及び実践が進められた。児童生徒の思いや願いに沿って柔軟に単元計画を変更していくという考え方が浸透してきた。

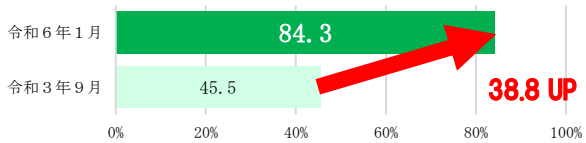
○ 昨年度よりも多くの地域の方との連携を図り、地域に出て学ぶ機会がさらに増えた。

○ 本校独自の質問紙調査（全児童生徒対象）の肯定的回答の割合を本事業開始時（令和３年９月）と現在（令和６年１月）とを比較したところ、「主体性」と「プレゼンテーション力」に関わる項目で大幅な上昇が見られた。

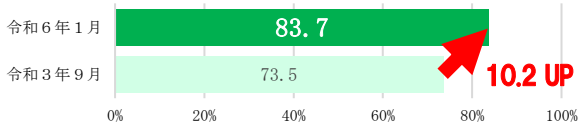
聞いている人を納得させる・説得することを意識して、資料の見せ方、話し方などを工夫している。



原稿を見ずに、必要に応じて写真や実物を見せたりスライドを指し示したりするなどして、分かりやすく話すことができる。



YOSHINA未来学（生活科・総合的な学習の時間）では、自分の「やってみたいこと」に、失敗を恐れずに、思い切って挑戦している。



（２）課題

● 系統表の各期に示した力が該当の学年で身に付いていない児童生徒が一部いるなど、児童生徒の資質・能力の確実な育成には課題が残る。

● 指導者側からは資質・能力の高まりが見られるが、児童生徒がそれを実感できていないなど、指導者の評価と児童生徒の自己評価に差がある。

（３）今後の改善方策等

○ 節目ごとに、活動の視点だけでなく、資質・能力の視点でも振り返りを行い、自己評価の力を高めるとともに、次の単元に向けた意欲につなげる。

○ これまでに積み上げてきた取組を持続可能なものにするため、「『自立した学び』を子供たちに」という本校の理念に基づく学校文化を創造する。